

## 総務文教常任委員会視察研修【秋田県五城目町視察】

日 時 平成28年5月10日(火) 13:20~15:46

出席議員 委員長：高橋政悦 副委員長：鈴木孝寿

委員：北村光明、木村好孝、口田邦男、中島里司

議長：加来良明

事務局 事務局長：佐藤秀美

執行側 学校教育課長：斉木良博

五城目町出席者

議会：小林議長、工藤事務局長（臨時議会が午後からも続開となったため挨拶のみ）

教育委員会：川村学校教育係長、戸部五城目小学校長、昆五城目小学校教頭

---

議 件 所管事務調査「学校現場における教育活動の状況について」  
五城目町視察 ●学力向上の取り組みについて

1. 五城目町議会挨拶 13:20~13:25
2. 五城目第一中学校視察 13:35~13:45
3. 五城目小学校視察研修  
(1) 開会 川村係長 13:56

(2) 挨拶 13:56~14:00

戸部校長：ようこそ五城目小学校へお越しくございました。五城目小学校第48代校長を務めている戸部裕隆です。本日はどうぞよろしくお願い致します。

本校は学校創立142周年ということで5月7日に開校した。授業を先に見ていただくが、秋田県県内で23番目に開校された学校で、戦後にPTAが組織された。戦後にPTAを発足したのは小学校では県内第1号ということで、本当に親身で歴史と伝統のある学校である。昭和30年当時、大合併で旧五城目町に周辺の村が合併して今の五城目町ができているが、昨年、町政執行60周年ということで、その記念すべき年に町唯一の小学校となった。一番多かった時には8校あったが、現在は1校ということで、児童数は今年度277名。学級数13となっている。

学校要覧を用意しているので、それを持ちながら子どもたちの様子を見てもらう。来週運動会があるので、通常の時間割と若干変更している学級もあると思うが、その辺はご容赦ください。

委員長（高橋政悦）：本日は貴重な時間を割いてもらいありがとうございます。時間もないので、校長先生より説明を受けて聞きたいことを聞かせてもらえればと思っている。よろしくをお願いします。

(3) 授業参観 14:00~14:25

(4) 説明 14:26~14:56

川村係長：おおよそ20、30分程度校内を見ていただいた。五城目小学校に来る前に五城目第

一中学校を10分程度立ち寄って、私の方から説明をした時も話題に上がっていたが、小中連携という括りだったり、もしくは中高連携という括り、また、五城目中学校は小中だけではなく、森山こども園という認定こども園があり、幼・小連携をしっかりと確立している。幼児期から義務教育課程そして高等学校の課程といったところまで、五城目町は一貫した連携という括りでいくと、ここ数年飛躍的に成果なども上がってきている。先生たちや子どもたち同士の交流などが活発になってきているという印象が教育委員会の中ではもっている。本日、五城目小学校の方でもいろいろと資料を準備しているので、資料を用いながら皆さんとの意見交換などの話を広げていきたいと思う。

戸部校長から説明をお願いします。

戸部校長：皆さんが来るから特別なことをしているということではなく、普段の授業の様子を見てもらったが、後で感想等があったらお願いします。

私どもの方で学校要覧と経営説明要項と五小ブランドの創造という経営重点事項を資料として用意している。

まずは学校の経営について説明する。学校要覧と要項を並べて見てもらいたい。明治7年に開校し、本年度142周年となっている。沿革の平成28年のところに「耐震基準により南側教室棟未使用化」とあるが、こちらの窓については平成22年1月末に耐震工事が完了している。ただ、新しい基準で今回案内できなかった南側が学校の場合、基準が0.7以上なければならないところ0.6前後の基準ということで、社会教育施設ではいいが学校教育施設では基準に満たないということで、安全を配慮して今年度から未使用化の措置を取っている。

2番の学校経営の構想をご覧ください。この学校教育目標は昨年度から目標を高く掲げた。140周年記念の時までは「夢を持ち 学び合う五小の子」という教育目標だったが、140周年のいろいろな記念事業をやっているうちに子どもたちの心も学力も安定してきた。私は校長として3年目だが、教頭としても平成21年、平成22年と2年間お世話になり、その当時と比べると今は非常に良好な状態になってきているので一段目標を高く掲げた。単に夢を持つのではなく、夢をもっと高く掲げ、ベースとなる心をしっかりと育みながらしっかりと子どもたち同士学び合う。転勤の子でもそこは重点にしている。学び合い、子どもの主体性、秋田の教育は教師主導でなく、あくまでも子ども主導の授業スタイルを掲げているので、子どもたちがいろいろと意見を出し合って、そこから課題を発見し、その課題を教師がうまく進める。学習の狙いと結びつけながら課題を解決していこう。文部科学省ではアクティブラーニング視点ということで、探求型の授業づくりを掲げているが、本県ではかなり前からそういうスタイルで、福井県の教師主導スタイルではない秋田型の子ども主体の授業づくりということを本校でもいち早く取り入れている。そういったことを学校教育目標にも掲げている。

サブとして「ゆめ チャレンジ 新しい自分」ということを付けているが、チャレンジ精神で常に課題を見つけ、それを克服、解決して、今までにはない自分というものに気づき、行動していくといったことを保護者や地域の方にもさまざまな機会に説明して理解を求めて今日に至っている。

あと、めざす学校像、子ども像、教師像を見てもらい、本校は「チーム五小」を目指していくをベースに、常に授業を改善していく、地域と協働して中身を充実させていく、常に時代の先を見据えての授業づくり。私がよく先生に話しているのは、「学校だけでは子どもを育むことはできない」と伝えている。そうしたことで「Collaboration Creation Change」をキーワードにしながら、「ふるさとの学びを基盤とした教育活動の実践」をキーワードにしている。国際化、情報化が著しく進んでいるが、海外の中で活躍するようになった時にはローカルな田舎の五城目をしっかりとわかっていなければ、出かけていってもやはり生き抜いていくことができない

というふうを感じる。私自身、平成15年にニュージーランドに出張に行き、日本語の通じないところにホームステイをしながら海外コミュニケーション研修をした。その時に「あなたはどんなところに住んでいるのか」「あなたの町の良さは何か」と矢継ぎ早に聞かれて、その時に自分が住んでいる場所、働いている学校をしっかりと理解していないとグローバル化の中では生き抜いていけないのではないかという体験をしてきたので、そういったところを基盤にしながら、そこにある重点事項を掲げ、更に経営重点事項の1番と2番に関しては、学校の教師であれば非常に大きい課題で、これでいいというものではないということなのかなと思っている。1番は学力向上、2番は心の教育、3番は体、4番は教職員の研修、5番は地域との連携推進を掲げているが、本校は4番、5番が非常にいい。教職員も非常に切磋琢磨できる教職員集団になっているし、ここは常に地域のボランティアが学校に出入りする学校で、入ってすぐ右側にふれあいルームがあったと思うが、あそこはボランティアの方が常に出入りして、自由にお茶を飲んでもいいことにしている。教頭時代に丁度あそこをつくったが、地域住民が学校と地域を結ぶコーディネーター役となっている方を1人教育委員会が配置してくれている。その方を介して地域の安全安心だとか、授業支援、環境支援ということもやってもらっている。教職員の多忙化解消にもつながっているし、授業の改善の支援にもつながっている、環境の支援にもいいということで、4番と5番は本当に問題がない状態である。

3番の体の方は、肥満傾向の子どもは他の地区に比べてちょっと多いかなと思うが、運動に関しては非常に良好な状態を保っている。本校では1番と2番を最重点ということでホームページ上でも秋田型の学校関係者評価も公開しているので、あとで興味があればホームページで昨年度の評価についても見れる。

右側の方に今年度の学校教育課題の取組目標と研究のことを書いているが、保護者と一緒にやっていく中で、今一番やらなければならないと思っているのは、2番の取組目標の(5)生活習慣の確立と対話ということで、いろいろなデータを毎年蓄積しているが、本校は比較的学力も良好で、自尊感情とか自己肯定感、子どもたちのそういったところも非常に良好に伸びてきている。一方で、スマートフォンやパソコンといったメディアの長時間視聴利用が秋田県の平均に比べてちょっと高い傾向にある。

経営説明要項の1頁、2番、児童をご覧ください。そこの強みと弱みと分けて示しているが、弱みの⑨家庭でのテレビ等の視聴時間が非常に課題となっている。それに伴って、家庭での親子の会話する時間が秋田県の平均に比べて少ないということが浮き彫りになってきている。それをPTA等と連携をして、そこを改善することが本校の更なる学力向上と心の部分で生徒指導上の安定を図ることがもっとできるのかなと思っている。本校では、私が来た1年目から家庭教育課題を掲げ、学校ではこういうことを頑張るので、おうちでも皆さまと改善に向けてやってくださいということで取り上げたところ、非常に改善傾向はみられるが、一方でまだ二極化なところもあり、課題解決に向けて更に取り組んでいる状況です。

経営説明要項の2頁目、本校には特別な支援を要する子どもが非常に多い。今日は特別支援学級の方には入らなかったが、支援学級に入っている子どもは現在5名で、普通学級の中で特別支援を要する子どもが21名いる。これは個別の指導計画をつくって、専門的な話になると特別支援学級に入って勉強してもらった方がいい子どもも保護者との面談等を通じて、普通学級に入っている子どももいるなど、さまざまな事情があって、21名は普通学級に入っている。そういった子どももいるということもあって、逆に他の子どもからいろいろと学ぶところもあり、優しい子を目指す子ども像の中にも掲げているので、そういった子どもがいる中でも非常に安定した学校となっている。常に専門機関、特別支援学校の教育専門官だったり、総合教育センターから専門家を招いて指導・助言をもらっている。私も特別支援の専門だが、

そういったことでやっている。

学力・学習状況は、一番下の全国学テの平均正答率は生の数字を載せてあるので、皆さまだけのものにしてもらいたい。公開についてはご配慮いただきたい。これは、中学1年生が昨年行った全国学テの平均正答率だが、ご覧のように非常に良好な状況です。これは子どもがいいからなのかというと、必ずしもそうではなく、本校の傾向としては小学校に入ってきた時は決して高くはない。ただ、6年間の中で先生方が授業改善に非常に一生懸命で、授業研究会もよくやるが、その中でだんだんと積み上げて学年が上がるにつれて学力が良くなってきている。結果として6年生になった時には全国平均よりも正答率が高くなったり、県平均を上回るような状況になってきている。特に算数Bは非常に高い正答率で、7、8年算数科を重視して研究してきた成果がここに出てきたのかなと思っている。これを売り物にしなが、教科の方も充実させている。

上の方は平成14年度から全国に先駆けて本県独自でやっている県の学習状況調査です。全国学テは平成19年からやっているの、それよりも5年前からこういう調査をやっている。これは県を100とした場合に、本校はどれくらいかというようなもので、正答率とはちょっと違う。平成27年5年生の数値を見てもらうと、全部県平均100に対して全部下回っている。当然、特別な支援を要する子どもも入っているので、その年によって数値が動くという状況だが、私どもでは4年生の結果を踏まえて、この学年の子たちをこの状況よりも少しでも高めていくことが私ども教員としては非常にやりがいのあることなのかなと思っている。数値が低いから先生方の力が弱いとか、そういうことは一切感じていない。その学年によっては子どもの能力があるので、それを踏まえた上で5年生、6年生で現状よりも良くしていきましようというスタンスでやっている。

結果、今の中1は非常にいい状況で、今の小学校6年生もよくなってきている。まずは、今の5年生を平均値に近づけていくということで、今日は見れなかったが学習態度が非常に良好で、おそらく伸びていくだろうと期待している。

最後に3頁、いろいろな仕掛けをしているが、今日の視察のテーマが学力向上だったので、主なものだけ上げている。今日、授業を見てもらったが、何のためにこの時間勉強するのか一目で子どもにわかるような板書を目指してもらっている。狙いの明確化、それから教師がしゃべり過ぎない。まずは子どもに話させる。子どもに課題をつくらせる。書かせる。そういうことで、発問、板書の工夫を徹底してやってもらうようにしている。それが子どもの意欲や学力向上につながる基本的なところだと思い、課題はきちんとノートに書くことを意識して、後でノートを見た時に今日はこういう勉強をしたんだなど、まとめは子どもの言葉でまとめる。そして振り返りをしっかりやって次に生かすという流れを実施している。

3つ目にT・T少人数指導がある。今年は職員が3名減になった。昨年度では高学年で理科などの一部教科担任制も導入していたが、職員が少なくなって教科担任制ができなくなったところもあるが、まずはチームティーチングをできるだけ取るようにした。一人の先生がずっと子どもを見ていくのではなく、チーム五小ということで、複数の教員がその子どもを見ていくようなスタイル。それから、習熟度別に学習の中身によっては学年のクラスを解体、担任によっては授業の中身を子どもに合わせて指導をするということでやっている。そういうことが結果につながっているし、本校は教育専門官が一人配置されている。今年は、花火で有名な大曲小学校の子どもを使って、本校の教員が算数科の授業を行うことになっている。算数の全国大会が本県であり、その授業者として本校の教員が他校の子どもを使って授業をやることになっている。そういう教育専門官を本校に一人配置されているし、本校の算数科については、小学館の方で昨年度、一昨年度も秋田型の授業ということで五城目小学校が紹介されているので、あとで書店等でお買い求めいただければと思

う。  
夏休み中に五小っ子学習会をやっている。また、漢字検定を実施し、基本の充実の方もやっているということで、一つひとつの積み上げが今の良好な状態になっていると思っている。本当に先生方が頑張っているところを少しだけでも見てもらえたかなと思う。

10番に主な事業ということで、いろいろなところと連携している。例えば、秋田県には国際交流大学があり、民間教育業者の「ハバタク」と協働して、6月から12月まで毎週留学生を本校に招き、6年生の授業に入ってもらっている。そうすることで中学校に向けて自然と良い状況を生み出していけるかなと思っているので、そこをご紹介して説明を終わりにする。

(5) 質疑 14:56~15:44

委員長：本題に入る前に校内を回ったが、見たところ自由に誰でも入って来れるような環境のような気がする。わが町の小学校は施錠して、来庁者はピンポンを押して教師が開けてという環境だが、PTAや地域で問題にはなっていないのか。

A：外部からの侵入ということか。

委員長：はい。

A：登校する時は見守りボランティアの方が途中に立っている。私は朝玄関の前に立ってあいさつをする。入るところは基本的には1か所なので、不審な方がいればすぐにわかる。時間が来ると児童玄関は閉めて、通常は一番左側のドアだけ開けるようにしている。セキュリティーの面で常にびしっとやればいいところだが、現状はそんなに厳しくはない。ボランティアの方や職員が敷地に入って来た時に常にわかるように、例えばボランティアルームは玄関の横で、下校の時もボランティアの方が来るので、鍵を閉めたらいいとか鍵を開けているから危ないという意識よりもまずは地域住民が不審な人を常に見たり、職員や支援員を休み時間にそれぞれの場所に配置するようにしている。そういうところでまず目を光らせるというスタイルを取っているのだから、施錠に関しては都市部に比べて非常に甘いかもしれない。

原則としては、始業時間になったら玄関は閉めるということはやっているが、ご覧のとおり本校は非常に外遊びが好きな子どもが多いので、カギをおろすと出て行くといなくなるし、その辺でどうしたら一番いいのかなというのはある。高台もあるし、上がってきた時にまず問題なくしていくのが目標だが、なかなか人的な部分と予算的な部分もあって、問われるとまだまだ弱い部分もある。

委員長：学校教育目標で高いところに夢を持っていくとあるが、その中の説明の中でPTAとの連絡強化という話があったけれども具体的な内容は何か。

A：地域と学校の垣根はあまりなく、常に校長室に誰かが来て、ボランティアも自由に出入りをしている。学校支援地域本部という組織が定着して7年くらいになるが、その中にPTAの方も入ってきている。4月の総会から年間をとおしてPTAの活動があり、何かあった時には常にPTAと相談をしながらやれる体制にある。あと、どこの学校でもやっていると思うが、文化部などのPTAの専門部がありますので、役員たちと相談しながらできるというところが、本校の強みでもある。地域全体が学校の活動に対して協力的で、そのベースとなっているのがPTAでもある。PTAの場合、資料の最後に「学校の取り組みを応援する組織」ということで、五城目町学校支援地域本部と書いてあるが、学校支援ボランティアという学校の教育活動を地域住民が応援するというので、現在登録している人は約50名ほどいるが、登録していない人もいろいろな教育活動に入り込んでくるので、そういうところと連携したり、ハバタクのように東京から五城目に移住してきた方で、非常に知的でレベルの高い方やグローバルな教育事業を展開している若手の方々などが五城目小学校の教育に対して非常に力強い支援をしてくれているので、学校でやりたいことを

相談するとアイデアを出してくれるなどの環境になっている。

A : 教育委員会としての見方や感じ方、現場との関わりの部分で言うと、防犯対策というところでは、そもそも学校が昭和 40 年代に何年かに分かれて進行して、50 年近く経つという校舎だが、その当時の校舎をまず維持しながらどう防犯対策を進めていくかという部分は、機能の現状の中でできる範囲は決まっている。一方で、子どもたちがのびのびと生活する、勉強する、走り回るなどの最大公約数ではないが、そういったところも先生たちの工夫やアイデアと地域の協力があって成り立っている。幸い、不審者情報はここ数年発生件数が 0 となっているが、いつ発生するかわからないということは常に頭に入れながら、どのようなという部分で地域の力、特に私がいた十数年前は小学校 6 校、中学校 2 校あったが、今は小学校 1 校、中学校 1 校ということで地域の小学校という認識が強くなってきていることと、少人数学級にせよ、学習調査にせよ、学校の地域活動ボランティアにせよ、7 年、10 年、15 年と継承しながら、継承を大事にする地域だと思っている。継承を大事にしながら経験値を積み重ね、その結果実情の課題や問題視されるようなところもカバーされているようなところがあるのではないかという印象と、教育委員会としての見方がある。防犯対策という中では、先生方の視線もあるし、スクールバス 5 台、スクールタクシー 2 台走っている。防犯対策も兼ねてスクールバスやスクールタクシーも定着してきている。そういった面も含めて総合的な形をどう構築していくかという課題と、これから改築事業などもあるが、そこら辺をしっかりと問題視していきたい。

A : 町の方でスクールガードリーダーが配置されており、午前中に五城目警察署の方でスクールサポーターを今年から配置している。不審者対策については、いろいろな方が学校を支えてくれているので、ちょっとしたことでも情報が入ってくるのが本町の良いところだなと思う。

北村委員：校舎を案内してもらい、壁に貼られているものを見るとすごく子どもたちに優しい学校だという感じがした。特に教室に入って授業参観をしたが、主役は子どもたちという感じがして、先ほどの校長先生のお話のように主体性を高めるように、自ら課題をつくらせるという教育がされている。これは五城目小学校だけなのか、県全体で取り組まれているのか。比較的最近のことなのか。

A : 五城目小学校は校歌にも「優しく」とうたわれているが、秋田県全体が子ども主体に授業を改善するようにいち早く取り組んでいる。その中でも五城目小学校が特に力を入れている。どこに行っても秋田県の場合は教育行政と教育機関、市町村教育委員会、現場が非常に太いネットワークで結ばれている。今日も指導主事の方から連絡が来たりと、電話でも自由にやり取りできる。また、中学校でも小中連携、また森山こども園とも幼稚園との小中の連携教育をしており、そういうところは強みかなと思う。何か困った時に学校だけで解決するという意識を持たなくてもいい。皆さんの力を借りながらここはやっていくとか、校長会も含めて、調査・研究も含めて非常にやりやすい雰囲気はかなり前から構築されてきていると思っている。何かあると常に連絡が取れるような状態になっている。生徒指導の問題があっても校内の委員会だけで解決できないような事例がある。そういう場合はスクールソーシャルワーカーが来て、校内のケース会議に入ってもらい、この子を良くしていくためにはどうしていったらいいかとアドバイスをもらえるような体制を県で構築している。そういうことは本校ではよく活用しているので、トラブルがあっても長引かない。隠さない、長引かせない、迅速にというのをベースに学校で運営している。そういったところが子どもにも理解されて、安心感があるのかなと思う。地域の方も子どもと結構関わる。

北村委員：ボランティアの方や P T A も専門部を持っているが、私自身の思いでいくと、P T A は小学校に子どもがいない人は P T A に入れないというような雰囲気があっ

て、これは全国的にもそうなのかよくわからないが、ボランティアをやる人の一定の条件などはあるのか。

A : 全くない。

北村委員：良いとか悪いとか判断すればということがあるのか。

A : まず、PTAは基本的に子どもを持つ親だが、子どもが大きくなっても子どもたちに関わりたいという思いを持っている方はコーディネーターがいる。なかなか積極的に学校を応援するのは、最初は遠慮をする。そこで、コーディネーターに探してもらおう。教員は公務をしていけばいいので、コーディネーターに投げかけ、現在50名くらい登録している。

北村委員：教育経験がないサラリーマンが多いのか。

A : 最初はサラリーマンが多かったが、今は保育園に勤めていた方で、私は小学校は女性の方がいいと思っている。男性は小さい子どもと関わる時に構えてしまうところがあるが、女性がコーディネートすると女性を集めてきたり、女性独自のネットワークがある。もちろん男性の方も必要で、教員じゃなく、地域を良く知っている方が本校を支えている。

中島委員：開校141年目から教育目標を変更したとあったが、当然、その当時の校長先生が地域事情などを総合的に判断して今の教育目標を立てることになったということだと思ふ。教育目標を立てるにあたって教育委員会との関わり方はどういう手順を踏んだのか。

A : 平成21年と平成22年と教頭でここにいた。前の教育目標は私が来た時にちょうど140周年で、ちょうど10年目だった。当時課題となっていることがどれくらい今できているのかをいろいろな調査のデータの中で本校の子どもたちはどういうふうになっているのかを経年比較をして、県の学習調査、国の全国学テ、その他にQ-Uテストという個人のソーシャルスキルがどのくらい上がっているか、心を図る調査も年に2回ほどやっている中で、心と学力を見て、学校評議委員会や学校関係者評価委員会もある。その中で保護者や子どもからアンケートを取ったり、教職員から自己評価もあげてもらおうなどのデータの中で、夢をもつのは本校の子どもには当たり前になっている。7、8年前は夢を持てなかったが、学校の方でいろいろと働きかけて、実際に授業実践をしたり、文科省の指定校に平成18年、19年なり、公開研究会もやっているなど、そういうものを取り組みながら地域にも理解してもらおうということでやって、平成20年に入ってだんだん夢を持つのが当たり前になってきた。何で学校で勉強するのが子どもや親、地域にも浸透してきた。ほぼ前の教育目標に関しては達成できたとは戻ってきた時に捉え、町の校長会が定例であり、いろいろと情報交換をしている。そういう流れと同時に県の方でも教育振興基本計画が地域スパンで第2期をやっている。私も県に十数年いたので、県の5年後、10年後を見据えたビジョンやプランもつくってきているので、そういうところと町の教育の指針の整合性の中で、前の教育目標は達成できたということで、次はもう一つというふうなことをやっていきたいということは、もちろん変える前の年に校長会の中で諮り、変えますということは伝えている。

中島委員：校長先生が、校長として学校経営をこういうふうにしていきたいということを皆に理解をしてもらい、正式な目標として持たれたと。

A : あとは学校評議委員会、学校関係者評価委員会、学校関係評価委員会は保護者代表で、PTAの各学年の代表に入ってもらい、前年度に「140周年も無事に事業が終わり、141年度目からは新しいスタートの年だ」と。小規模校も閉校になり、昨年度30人くらい小規模校から入って来たという記念すべき年に学校教育目標も変えることで一体感も出てくるということで、さまざまないい要素を学校教育目標に持ってくるということでやっている。

中島委員：学校教育とちょっと離れるが、廊下にある子どもの日焼けした顔が描いてあった。

この地域では学校と少年団活動の関わりはあるのか。

- A : 平成 26 年度に文部科学大臣表彰をもらっている。放課後子ども教室推進事業といって、いわゆる放課後や週末の子どもたちの青少年教育の活動に関して、地域住民が指導者になったり、地域の学びの成果を子どもたちに還元しながらいろいろな教室をやるということで、学校では学校支援地域本部というのがあるが、五城目町の町民センターの方に生涯学習課が事務局となって青少年教育事業を主に土曜日、日曜日にわらしべ塾をやっている。前は地域こども教室という名前で、文科の事業を活用して町の方で展開しているものが文部科学大臣表彰を受賞した。年間の教室数は料理、囲碁、将棋、スポーツ、茶道、踊りなどを毎週のようにいろいろな教室をやっている。青少年教室事業に関しては、社会教育部門でまずやるということで、申込書は学校から配付し、届け出は学校でも直接でもいい。昨年度は過去最高の参加人数で、6月から2月の下旬まで行う。

口田委員：今、校長先生から取り組みについていろいろと説明を受けた。私たち清水町も似たことをやっていると改めて感じたが、やっていることに対して学力向上に結びついているのかという問題が我々の町にもある。こんなことに力を入れたら学力向上に結び付くというものがあれば教えていただきたい。

- A : 一番には心の安定が必要。学力といっても基本は学級経営で、学級経営がきちんとできるためには教職員の組織力、輪や一体感があるか。一体感を持たせるには教職員に自信を持たせることをやっている。教員一人ひとりにどんな力があって、どんな得意技があるかをうまく引き出す。そのためには「空気のおいしい職員室」を私が来た時に確立した。そこで言い合いをするのは全ては子どもたちのため、家庭のため、地域のためで、それは結果的に自分のためになるというキーワードでやっている。校長だからといって校長に物申せない、裸の王様にするなど言っている。校長だからといって威張ることもないし、校長に対してどんどん意見を言うようにしている。その中で子どものために、子どもに良いと思うことを皆で考えて、チーム五小でやろうと。まずここがベースで、ベースがうまくいけば地域との連携や協働もうまくいくし、多少忙しい時は皆でカバーしてやっていくという形にしている。暇だということはないが、一人の力よりも二人の力、二人の力よりも三人の力ということで、それぞれの業務を孤立させないのが大きいと思う。

- A : 私も本校5年目になるが、先生方がとても意欲的で仕事に対して熱心だと思う。仕事をしていて自分的にもやりやすい。先生方が個人個人でももちろん頑張っているが、最終的には子どもたちのためを思って皆で協力していこうという意識が高いと思う。他の学校と比べることはできないが、本校に来てからはすごく自分自身もやりやすい。すごく高いところに目標を持って毎日先生方は仕事をしていると感じている。それが学力にも関わっているのではないかと思う。

鈴木委員：その年の学年の雰囲気によっていい、悪いはあると思うが、その中で保護者が求めるニーズはどこにあるのか。

- A : ここは歴史と伝統があるので、保護者は「ちゃんとうちの子の学力を高めてほしい」という興味・関心は非常にある。生徒指導上で何かで揺れたりすると、すぐ学校に来る。私はそういうことをプラスに考えて「よく来てくれた」と、3年目で今年が一番安定しているが、やはり家庭の問題などいろいろある。ひとり親家庭や就学援助をもらっている子どもの数も多い。高い分しっかりと情報を伝えていく必要がある。PTAの県大会、4月には私の学校経営方針の資料説明、五小ブランドの資料などを配り、学校でしていることを常に伝え、家庭でもこういう教育をしてほしいと伝える。7月には全国学テの速報をパワーポイントで説明する。本校は6割弱参加するが、来た方にお得な情報を与えるということで、速報を分析して保護者に伝えている。そうすることで、自分の学年はどういう状況にあるのかが保護者はわかる。また、夏休み中に個人面談、二者面談、三者面談をやる。私は基本的に毎



日授業を見て回る。見に行くことによって先生もしっかりやらなければならないし、子どもの様子もわかる。そういうことを保護者に伝える。情報を公開し、心配事があればいつでも来てもらう。それでも、この地域は関心があるので、子どもの情報を全て鵜呑みにしてしまい、町や県の教育委員会に電話をかけたりする方もいて、教育委員会から連絡が来ることもある。その分教員も頑張らなければならないので、ある意味大変なこともある。

北村委員：公的な学校での教育だけでは足りなくて、学習塾が必要だと考える親はいるのか。

A : いると思う。現に公文などの学習塾に通い続けている子どももいる。基本的には秋田県に民間の進学塾となるようなものはあまり入り込めていない。学校でしっかりとやるので、小学校の段階では必要がない。

A : 五城市町では平成23年度から学童保育の拡充ということで、4、5、6年生を対象に放課後学習の空間をつくっている。中学校では放課後学習支援ということで、非常勤の職員を配置してサポートしているので学習塾にはほとんど行かないという感想を持っている。教育委員会としての取り組みとリンクしていたり、地域とニーズがあっている。

A : 習字、そろばんが最近増えてきている。公文に行っている子は何人かいるが、英語も増えてきていて、本校は外国語活動も充実している。

斉木課長：家庭教育課題を保護者に出していると言っていたが、ペーパーで出しているのか。

A : 提案書としてペーパーで出している。県の学習状況調査で子どものメディアの視聴時間や平日の勉強時間という項目があり、県との比較となっている。本校の学校運営アンケートを年に2回(7月・12月)やり、どれくらい改善されたかがわかる。そういう過去のデータがあり、そのデータを保護者に示す。その中で家庭生活の部分が課題だということを保護者にもわかるように提示している。そこが改善できればもっとよくなっていくということで、あえてアンケート項目に入れている。それを伝えたことで、大分改善された家庭も増えてきているが、直らないところと二極化している。直らないところをなんとかこちら側に引っ張ってきたいと思っているが、まずは裏付けとなるデータを保護者に開示し、動機づけと絡むようにしている。

斉木課長：二極化の部分についてはこれからの課題という感じなのか。

もう1点は、いろいろな条件が重なって良い循環になった結果、学力も上がってきているということだと感じるが、学校は人の集団なので、それをうまく継続していかないといけないと思う。その継続をしていく部分で、気を付けていることはあるのか。

A : 教員の経営、参画意識を持続化させること。校長に言われたことをただやるという意識でいくと続かないと思うので、組織力というかチーム力ということで、主任を大事にする。本校の場合は要覧のところにあるとおり、教務部、管理事務部、学習推進部、心と健康推進部と各部門があるが、そのまじりキャップを大事にするということが長続きをする秘訣だと思う。指導部会を毎月行っているが、指導部会である程度決めたことを校長がだめだと上からバチンとしてしまうと、せっかく先生方で考えたものができなくなってしまうので、そういう組織であってはならないと思っている。指導部会の前にキャップと管理職で事業者会議をして、生徒指導上では学校生活サポーターと教頭が司会をして、ここで悩みなどを出してもらい、心の安定を図るための情報交換を意図的に教員の教育課程の中で時間割の持ち時数の中でも同じ時間だけ全部あけている時間を設けたりする工夫をしている。そうすることによって、校長が変わったり、誰かが変わっても本校の良さが持続できる、継続できるようにしている。やはり、継続性というのは学校教育の大きな課題だと思う

ので、それを少しでも無くすような仕組みづくりが重要だと思う。

(6) お礼挨拶 15:44~15:46

鈴木委員:時間をオーバーしてしまい申し訳ない。すごく有意義な話を聞くことができた。改めて感謝を申し上げる。今回、いろいろと縁があり、お邪魔させてもらった。北海道清水町と似ている地域なのかなということでお世話になりました。話を聞いて特効薬はないと。まずは一つひとつサイクルを回しながら今日の話を生かしてやっていきたいと思っている。本当に、貴重な時間をありがとうございました。

(7) 閉会 15:46